八

「これで終わらせる」

馮湧の強い言葉に、都虞侯の楊佶(ようかつ)は思わず振り返った。

「ここが正念場と」

「たった数十人の賊に、我ら禁軍がいつまでもかかわずらってはおれん」

「確かにその通りですが、奴ら相当にしぶといので、慎重にことを運びませんと」

楊佶は馮湧をみとめていた。禁軍の指揮官として赴任してきた将軍を、楊佶はこれまで多く見てきた。確かに、時の権力者の引きで禁軍の将軍になったという側面はあるが、まともに武挙を通っており、兵達の訓練にも自ら立ち会っていた。文を重んじ武を軽視する重文軽武の宋という国では、有力な将軍の子弟でさえ、武人にならず文に走っていた。武挙には、科挙に落ちて仕方なく受ける者もいる。軍人らしい軍人が育たないわけだった。楊佶は既に四十を超えている。長年軍とともに生きてきて、もう軍以外の生活は考えられない。将軍に昇る夢は、四十を過ぎた頃に捨てていた。有力者の引きがなければ将軍には昇れない。銅細工職人の家に生まれた楊佶には、賄賂とする金もなかったし、軍需物資の納入に関する不正にも手を染めなかった。

多くの禁軍将校が、それを役得として享受していたが、楊佶はそれに背を向けていた。太原府は、宋でも一・二を争う銅器の産地だった。その職人であった父が、利を求めず真面目に職人としての腕を振るっていたことに、楊佶は尊敬の思いをいだいていた。そうした職人達が、薄い利で精魂込めて作った武器防具を、商人達は莫迦高い利を上乗せして軍に納める。将校は、高いままで納めさせた後で、商人から賄賂を受け取る。楊佶には、それがどうしても出来なかった。軍人が大きく稼げる唯一の道だったが、楊佶には父を汚すように思えたのだった。馮湧も、あまり賄賂には熱心でない。そんなところも、馮湧を気に入

っている理由の一つかもしれなかった。
「都虞侯、ここで逃すわけにはいかん。生かして捕らえるのが難しいようなら、殺しても構わん。知府は、生死については言及しなかった」
「分かりました。あまり手こずると、都監様の将来に関ります。ここは、一度の攻めで全滅させねばなりません」
「その通りだ。こんなことで、軍人としての経歴に傷をつけたくない」
「問題は、あの黒旋風ですな。まさかあ奴が、こんなところに現れるとは思いませんでした」
「あいつさえ抑えれば、後は何とかなる」
「私が黒旋風に当たります。私とて、これまで幾度も遼軍と戦った経験があります。黒旋風を倒すことは無理でも、抑えるくらいは出来ます」
「そうか、おまえが当たってくれるか」
馮湧はほっとした表情を見せた。馮湧は、自らが当たることを怖れているわけではない。馮湧の武は相当なものだ。ただ、黒旋風に当たると全軍の指揮を執れなくなる。それほど黒旋風は恐ろしい相手だった。
こうして自分の意向を訊かれることに、楊佶は新鮮な感動を覚えていた。
夜はすっかり明けていた。馮湧と楊佶は、騎兵達に攻撃の合図を出した。

後方から馬の蹄の音が聞こえて来た。馮湧は後ろを振り向いた。遠くから土煙を上げて
一騎駆けて来るのが見える。
「何だあれは。西門の部隊からの伝令か」
馮湧は近くにいる護衛兵に訊いた。都虞侯の楊佶は、前衛で指揮するために離れている。馮湧の護衛には、太原府駐屯禁軍の中でも選抜された十人の騎兵があたっていた。
「蒙重(もうじゅう)将軍の部隊からでしょうか。」

今回の任務の主力は馮湧の部隊だったが、黄文炳はさすがに馮湧だけに押しつけるのに気がとがめたのか、同じく兵馬都監である蒙重の部隊にも出動を命じ、補佐の任に当たらせていた。その蒙重は、西門を警備しているはずだ。

馬の姿はみるみる大きくなってきた。もう、乗っている者の様子まで分かる距離に迫っている。

「水色の戦袍(せんほう)だ。あんなものを着ている兵士は禁軍にはおらん」

「鎧も着けておりませんな。胸当てと足を守る具足(ぐそく)しか着けておりません。一体何者でしょうか。こんな戦場に現れるとは」

「いずれにしても邪魔なだけだ。名を訊いて、追い払え」

「はい」

護衛兵の一人が、駆けて来る馬を遮った。

「止まれ。誰の指示でここに来たのだ」

馬は信じられないほどしなやかに止まった。大きな馬だった。護衛兵の乗る馬より二回りは大きかった。あれだけ疾駆しても、馬は息を乱していない。乗っている者は、兵士にしては小柄だった。

「名を名乗れ。どこの隊の者だ」

水色の戦袍を着けた者が兜を取ると、護衛兵は仰天した。

長い黒髪が、ゆらりと肩の下まで垂れた。

「おまえ……女か」

「おまえという名ではない。わたしの名は黄玉。雪華姉様を助けに来た」

「雪華姉様だと。何の話だ」

そう言った後、護衛兵は言葉を失った。見とれてしまったのだ。

細面(ほそおもて)の輪郭に緩い曲線を描いた美しい眉。その下には青みがかった瞳と細く高い鼻梁。さらには絶妙な均衡を見せる口元。護衛兵は、呆けたように黄玉の顔を見つめ続けていた。

「ええい、煩(わずら)わしい」

黄玉が右手を腰に回した。

少しして、護衛兵が大きな音をたてて馬から転げ落ちた。落ちた護

衛兵は、慌てて手を着いて立ち上がろうとした。
「ぎゃああ」
護衛兵が絶叫を上げて地を転げ回っていた。護衛兵の両手首から血が噴き出している。あるべきはずの両手が失われている。さきほどまで乗っていた馬の手綱に、しっかり握ったままの両手が、何かの悪戯のようにぶら下がっていた。

「命までは取らぬ。早く縛れば助かる」
感情を見せぬ視線を投げかけて、黄玉はそのまま前進した。
馮湧は目を疑った。遠くてはっきりとは分からないが、護衛兵がいきなり馬から落ちてのたうち回っている。何事が起きたかは判然としないが、敵であることは間違いなさそうだ。
「奴を斬れ」
馮湧は周囲の護衛兵に命じた。また、厄介が増えた。馮湧は舌打ちしたい思いに駆られた。
二騎が馮湧の脇を固め、残りの七騎が馬を走らせた。
黄玉は怯むことなく突き進んで来る。右手を水平にし、剣を握っている。随分大きな馬に乗っていた。
先頭の護衛兵が黄玉とぶつかった。護衛兵の繰り出す槍が、黄玉を捉えたように見えた。
しかし、穂先は空をきっていた。黄玉は素早く身体を左に開き、目にも留まらぬ速さで右手の剣を突き出した。護衛兵の項から、剣尖が突き出ているのが見えた。
「何と……」
馮湧が驚いた。
残りの護衛兵は、相手がまだ若い女であることにはじめて気づいた。しかも、天女のように美しい。
黄玉の心に焦りが生じつつあった。一刻も早く雪華の無事を確かめたい。だが、次々と邪魔が入る。蒼月の力はまだ十分に残っていた。

まとめて片づける。黄玉は蒼月に言った。
「行くぞ、一気に倒す」
蒼月が前脚を上げて大きくいなないた。護衛兵を乗せた馬が、一瞬怯んだ。
黄玉は護衛兵の真ん中に飛び込んだ。正面の兵の槍をかわすと、そのまま突進して首に剣を突き立てた。蒼月の勢いに、護衛兵は呆然としている。黄玉は向きを変えて左手の兵に向かった。見事な速さで槍が繰り出される。黄玉はその穂先を剣背で払うと、そのまま剣を滑らせて槍を握る手首を切り落とした。護衛兵が絶叫を上げた。蒼月がいきなり横に飛び跳ねる。そして、後ろ脚で蹴り上げた。後ろにいた護衛兵の馬が崩れ込んだ。転げ落ちる兵の左目を、黄玉の剣が貫いた。
残った護衛兵は息を呑んだ。

「全員でかかれ」
護衛兵の一人が怒鳴るように叫んだ。残る三人が一斉に黄玉に打ちかかる。
蒼月は平然とその中に飛び込んだ。黄玉の動きは舞いのようだった。天女の舞。だが、敵にとっては死を運ぶ舞だった。次々と護衛兵の首から血が噴き上がる。黄玉の舞も止まった。剣で首を切り落とすことは、よほど幅広で重い剣でなければ無理だし、そんな剣は片手では持てない。まして女の黄玉にとって、そんな剣は武器として不向きだ。
黄玉の剣は、剣尖が両刃の刀のように丸みを帯びている。だが、刀と違って小さな範囲しか斬れない。黄玉はその欠点を、正確に急所を突くことで克服した。だから、倒れた三人の護衛兵の傷も、見た目は一寸にも満たない小さなものだ。だが、噴き出す血の量は、それとは不釣合いなほど多かった。
馮湧は、信じられないものにでも出くわしたように黄玉を見つめている。瞬く間に太原府禁軍の精鋭を屠(ほふ)ったのが、娘と言ってもよい若

い女とは。
「何だというのだ」
馮湧は、この任務の不可解さにあらためて疑念をいだいた。
「次から次へと、一体いつまでこんなことが続くのだ」
馮湧の両脇を守る護衛兵は、逃げ出しそうなほど狼狽している。
「女、おまえは何者だ。なぜ、こんなことをしたのだ」
黄玉は抜き身の剣を手にしたまま、ゆっくりと馮湧に近づいて来た。
「わたしは黄玉。雪華姉様を救いに来た」
黄玉の声は、騒がしい戦場の中でも不思議によく通った。
「雪華……宋家村の宋雪華か」
「そうだ。なぜ、おまえ達は姉様を捕らえたのだ。姉様は捕らえられるようなことは何もしていない。理不尽であろう」
宋雪華のことは、馮湧も噂で聞いていた。噂のどれもが、敬意と賞賛に溢れたものだった。馮湧自身も一度会ってみたいと思っていた。その手腕に、この国をより豊かにする何かの希望を感じていたからだ。この国がこのままでいいとは、馮湧も思っていない。だが、賄賂や追従を使わないと、なかなか上には昇れないのも事実だ。有力者に阿り、そのつてで若くして禁軍将軍に昇った。科挙に受かる自信がなかったので武挙を受けた。父も武人で、武芸は幼い頃から仕込まれていた。武人として生きるには、禁軍以外考えられない。

そこで、高俅の兄である高傑に近づいた。かなりの金を使い高傑の知遇を得た。この一族は、一人を除いてとにかく金に弱い。高傑は金吾衛大将軍※という高位にいて、弟の高俅は、禁軍殿前司という帝に最も近い位置にいる。この二人の押しがあれば、禁軍将軍になることなどわけもないことだった。高俅の下の高伸という弟だけは、この一族唯一の、無欲な士大夫らしい男だった。

※金吾衛大将軍　首都開封府の治安責任者

金とつてを使って地位を得た。馮湧は、そのこと自体については仕方のないことだと思っている。しかし自分の心のどこかで、それを恥

じていることも感じていた。だから、禁軍将軍としてはじめて赴任したこの太原府では、手を抜かずに勤めてきたつもりだった。金に対しても、必要以上に執着しないように心がけている。幸い、片腕とも言える都虞侯の楊佶は、優れた軍人で信頼に足る良将だった。金でつかんだ地位ではあるが、真面目に勤めることでその後ろめたさは薄まるのではないか。馮湧はそう考えていた。だから、宋雪華のような者には好意を持っていた。自らの熱意と才覚のみで、壊滅した村を立て直す。

それも、民のことを考えてだ。自己の利ばかりを追い、民を苦しめることに何の痛痒も感じない商人達と、真っ向からぶつかってもいた。馮湧はそこに、この宋という国が忘れ去って久しい、何かとても大切なものを感じていた。

「そうか、宋家村のあの娘だったのか……」

馮湧は独り言のようにつぶやいた。

「そちらは禁軍騎馬隊であろう。なぜ出動しているのか。禁軍が出るようなものではないはずだ」

黄玉の言葉は馮湧を直撃した。

黄玉という名も、兵士達がよく口にしていた。美貌の女剣士。その剣の冴えは、まさに天才的なものと噂されていた。

馮湧は左右の護衛兵に言った。

「おまえ達は楊佶のいる前衛に向かえ。そして、楊佶に必ず伝えるのだ。攻撃は中止だとな。手出ししてはならん。逃げるのを、ただ見送れとな」

護衛兵は怪訝（けげん）な表情を見せた。

「これは私の命令だ。必ず伝えよ。詮索は許さん。これが、おそらく最後の命令だ」

馮湧が見せた厳しい表情に、護衛の二人は馬を返して前衛に向かった。

「さて、黄玉とやら。私は太原府駐屯禁軍兵馬都監馮湧だ。禁軍がなぜ出動したかは、込み入った事情があってのことだ。今はただ、知府

の命令に従っただけとしか言えぬ。そして、罪人が宋雪華だとは、おまえから聞いてはじめて知った。宋雪華が大罪を犯すとは思えん。おそらく冤罪だろうな」

「そうだ。姉様が捕らえられるいわれはない。魯櫂と黄文炳の陰謀だ」

そうか、そういうことだったのか。馮湧は、今まで不審に思っていたことが、霧が晴れるように見通せたように感じた。魯櫂が宋雪華の交易を横取りしようと企み、利につられて黄文炳がその話に乗った。分かってしまえば、馬鹿馬鹿しいほど単純な話だった。そして、自分は馬鹿な役回りを押しつけられている。馬鹿らしくて笑うしかない。こんなことのために、苦楽をともにした兵を失ったのか。馮湧は涙が出そうになった。

「時が惜しい。退いてもらおう」

「そうかもしれんな。だが、私は軍人だ。部下を殺されてどうぞとは言えん」

「くだらぬ感傷だ。正しいことが分かれば、潔く手を引くことこそ賢明というものだ」

「どのようなものであれ、任務は任務だ」

「真実を知って、なお改めぬのは頑迷というものだ」

「黄玉とやら、通りたければ私を倒してからだ」

馮湧が槍を構えて突進して来た。

黄玉も蒼月を駆って馮湧に向かう。周りの騎兵は呆然と眺めているだけだった。

馬が交差した。馬の力の差は歴然だった。蒼月が馬首を返した時、馮湧はまだ背を向けていた。馮湧が馬首を返す前に、黄玉が二撃目を繰り出す。馮湧は、背を向けたまま鐏(そん)でそれを弾(はじ)いた。

「剣は馬上での戦いには不利だ。あえて剣を使うのにはわけがあるのだろうが、長柄武器(ながえぶき)とやり合うには踏み込みすぎる」

馮湧が諭(さと)すように言った。

「もう一度来てみろ」

馮湧は、誘うように馬首を返した。

黄玉は、無言で剣を水平に構える。かなりの腕だと、馮湧を認めた。
いきなり槍が伸びて来た。凄まじい速さだった。黄玉は、巧みに穂先をいなして剣を振る。槍の鐏※が黄玉の脇腹を襲った。間一髪のところでそれをかわした。

※鐏　槍の石突

「どうだ。踏み込みすぎると鐏が来るぞ。剣は槍より短い。それが短所でもあり、時には長所にもなる。槍はかわされた時が勝負だ。だが、あまりに踏み込みすぎると鐏で打たれる。鐏よりも、手を伸ばした時の剣の方が長いことを活かすのだ」
「どうしてそのようなことを教えるのだ」
「私を殺した者が、そう簡単に死なんようにと思ってな。おまえは目がいいから、攻撃をかわすのはうまい。だが、その後の間合いが近すぎるのだ。さきほどの兵達との戦いで、それがおまえの唯一の欠点だと感じた。おそらく、槍の本当の使い手と当たっていなかったのだろう。鎗や棒はその両端が武器となるのだ。達人になると、槍は突くものではなく打つものだと言う。槍を一本だと思うな。二本あるのだと思え」
「何を、御託(ごたく)を並べておる。戦いの最中に、そのようなことを言うとは」
「黄玉、生きるのだ。生きて、宋雪華の行いを援けるのだ」
馮湧が、黄玉に槍を突き出した。それをかわした後、蒼月は一尺ほど横に逸れた。馮湧の繰り出す鐏が空をきった。黄玉の剣は、馮湧の首に達していた。
「見事だ、黄玉。その間合いを忘れるな」
馬の首にもたれかかりながら、馮湧がゆっくりと言った。首の傷は深くはないが、血の流れを止めることは出来そうにない。黄玉が剣を収めて馮湧に近づいた。
「なぜ、あのようなことを。まるで、わたしに教えるように……」
「どうしてかな。罪人が宋雪華だと分かったからかな。会ったことはないが、話には聞いていた。どこかで宋雪華に共鳴していたのだ。罠に嵌って罪をきせられただけだろう。そんなことに、私は手を貸して

しまった」
馮湧は、薄れゆく意識の中で黄玉に微笑んだ。
「兵達をこんなに失い、私がおめおめと生きるわけにはいかない。おまえを見て、そんなふうに思えてきたのだ。それなら、少しでも役に立って死にたかった。黄玉、おまえは強い。そして、これからも強くなる。宋雪華の盾となるのだ。おまえなら、それが出来る」
黄玉は何も言わず、ただ軽く抱拳※した。
※抱拳　腕を水平にし、左手で右拳を包む礼。武芸者同士では一般的な礼
「兵士全員に告ぐ。この者を通すのだ。遮ってはならん。これが、私の最後の命令だ」
消えゆく意識をふり絞り、馮湧が大声で命令した。
「黄玉、さあ行くのだ」
黄玉は、まるで無人の野を駆けるように城門に向かった。

禁軍の前衛が突然乱れだした。李逵は何が起きたかは分からなかったが、この機会を逃してはならないと感じた。
「石勇、今だ。曹瑛も続け」

石勇は雪華を乗せた残月を促し、民家の陰に向かって飛び出した。その後を、短弓をかざした曹瑛が続く。
李逵は陳統と晁蓋に言った。
「まだ出るな。様子がおかしい。もう少し見きわめた方がいい」
「どうしたのかな。襲って来るどころか、隊列を乱してるみたいだ」
陳統が訝しげな顔をした。
「何か、思いがけないことでも起きたみたいだな」
晁蓋も同意した。
「分からん。だが、こういう時にみだりに突っ込むのは危険だ。誘いの罠かもしれん」
李逵は慎重に敵の様子を見た。
石勇達は、すでに五軒目の民家の陰に達している。禁軍に気づかれ

た気配はない。
「李逵の小父さん、隊列の真ん中が開いたよ。どうしたんだろう」
陳統の言葉通り、禁軍騎兵隊の後ろの方が、真ん中から割れてきている。李逵はすぐに陳統に言った。
「馬を降りて城壁に登れ。何が起きておるのか確かめるのだ」
そう言いながら、李逵は心の中で確信していた。間に合ったか。黄玉ならば、これくらいのことはする。
「晁蓋。皆とともに、禁軍前列との中間まで出るのだ」
「いいのかい、出ても」
「おそらく黄玉が来たのだ。後ろから追われんように、おまえ達はすぐに動ける態勢でおれ」
「そうか、黄玉か。あいつ本当に来たんだ」
晁蓋は、すぐさま城門を駆け抜けて行った。
「玉姉ちゃんだ。あんな大きな馬、そういるもんじゃない。間違いないよ。あれは蒼月だ」
陳統の声は喜びに満ちていた。
黄玉が来た。それは、そう間を置かず聞起も来るということだった。黄玉と聞起、たった二人の加勢という以上の頼もしさを陳統は感じた。これで仲間が一つになる。数の何倍もの力を出せる。陳統は、全身に気が満ちるのを感じていた。

黄玉の前に一人の将が立ち塞(ふさ)がった。四十を大きく過ぎているように見える。その気は静かだが、利剣の鋭さを秘めている。
「退いていただきたい」
黄玉が静かに言った。
「おまえがここまで来たということは、馮都監は亡くなられたということか。私は都虞侯の楊佶という。馮都監の命令は受け取った」
「なら、退いてもらおう」
「罪人は宋雪華だと言ったな」
「罪は何も犯していない。罪をきせられただけだ。魯櫂と黄文炳に」

楊佶は、得物の大斧の先を下げて、少しの間考え込んでいた。
「そうだろうな。宋雪華とおまえ達のことは知っている。罪を犯すとは思えん。魯櫂が企みそうなことだ」
「では、早く退いてくれ。時が惜しい」
「そうはいかん。馮都監を殺されて、私がおめおめと生き残るわけにはいかん。馮都監は槍の名手だった。それを倒したおぬしのことだ。敵わぬかもしれぬが、手合わせ願いたい。時間は取らせぬ」
楊佶は大斧を頭上に構えた。
「いらぬ殺生はしたくないが、どうしても退かぬと言うのなら、戦うしかない」
黄玉も剣を水平に構えた。その美しさに、騎兵達の間からどよめきが起こった。
同時に馬が動いた。速さは蒼月が圧倒している。
楊佶が大斧を振り下ろした。空気が焼けるような鋭さだった。黄玉はぎりぎりのところでそれをかわし、楊佶の胴を払った。剣は届いたが、僅(わず)かに鎧を傷つけただけだった。馬が再び向き合う。またぶつかった。そのまま五・六合、剣と大斧が交錯した。楊佶が石突で、黄玉の頭を狙った。一瞬早く、黄玉の剣が楊佶の左肩を貫いた。黄玉がゆっくりと剣を引き抜く。楊佶の大斧は地に落ちていた。意外なほど血は出ていない。
「もういいと思うが。武人としての務めは十分果たしただろう」
黄玉の声は相変わらず静かだ。
「女に情けをかけられるとはな」
「男でも女でも同じだ。無益な殺生はすべきではない」
楊佶は兜を取って黄玉を見つめた。肩の刺し傷から、あまり血は流れていない。
「少し時をくれないか。おまえ達を捕らえようとは思わぬ。西門を見張っている蒙重の部隊がそのうち来ようが、まだ時がかかるだろう」
楊佶の言葉に、黄玉は返事をしなかった。

「宋家村のことはよく知っていたのだ。おまえ達が思っている以上に、おまえ達は知られている。特に、この太原府周辺ではな。私には一人息子がいる。十八でな。ちょうどおまえ達と同じ年頃だ。以前は私と同じ道を志していたが、おまえ達のことを知ってからは、すっかり虜になってな、色々と話を聞いて来ては私に語るようになった。そのさまがいかにも嬉しそうなので、私もおまえ達に興味をいだいたのだ。確かに、おまえ達は見事だった。どの商人の力も借りず、多少は運があったにせよ、自らの努力と才覚のみで交易を立ち上げた。それも、民から感謝されるようなやり方でな。魯櫂がおまえ達に脅威を感じたのも、仕方のないことだったかもしれん。およそ魯櫂とは対照的なやり方だからな。おまえ達のせいで、魯櫂の商売にも少なからぬ支障が出ているとも聞いている」

「それがどうしたと言うのだ」

黄玉の声は淡々としていた。

「前置きが長くなってしまったな。頼みたいのは息子のことだ」

「息子……」

「息子は、本当におまえ達に心酔しているようなのだ。こんなことの後に頼めるような筋合いではないが、もしも、おまえ達の仲間に加わりたいと押しかけたなら、一つ考えてやってはくれまいか。それが息子の望みなのだと、私には思えるのだ」

黄玉は、戸惑ったような表情を見せた。

「わたし達は、これで天下の大罪人だ。そんなわたし達と行動をともにすれば、あなたの御子息も追われる身になるが」

「それは、宋という国に追われるということだ。天に恥じることではない。人として正しい道を歩もうとすると、この国ではしばしば犯罪者として扱われる。国の側にいる私には、それがよく分かる。だから、息子には私と同じ道を歩んでほしくなはない。私もこの国はおかしいと思い続けてきたのだ。たとえ宋という国から犯罪者の烙印を押されても、人として罪を犯すより遥かにましだ。私はそう思っている」

楊佑は時々痛みで顔を顰(しか)めたが、その言葉はしっかりしていた。

「分かった。わたし達も仲間が多ければ助かる。もっとも、誰でもいいというわけにはいかぬが。まず、会ってからだ」
楊佶はほっとしたような表情を見せた。
「息子は幼い頃に母を亡くし、男手一つで育ててきた。礼儀はあまり知らぬが、それなりに書も読ませ武も修練させた。私以上に文も武も出来ると思う。親の欲目と言われればそれまでだが」
「あなたはどうする」
「都監を失うような大失態では言い逃れも出来ない。それに、私自身もうこんな国のために働きたくはない。ここにいる兵達も、思いは同じようなものだ。私は私で、何か生きる道を探してみる」
「そうか、あなたの斧に殺気が感じられなかったのはそのためか」
「それでも武人としての私の意地に付き合ってくれた。感謝している。息子の名は楊林(ようりん)。
派手ないでたちが好きなので、錦豹子(きんひょうし)と呼ばれている」
「憶えておこう」
黄玉はそう言い残して、騎兵の最前列を抜けて行った。

禁軍騎兵隊の最前列から、鮮やかな水色の戦袍が飛び出して来た。
「玉姉ちゃん」
陳統が大声で手を振った。それに応えるように、黄玉も剣を回していた。
「黄玉が間に合ったか。皆、攻撃は中止だ。理由は分からんが、禁軍に戦意が感じられん。
黄玉とともに亀伏山に向かう」
李逵が陳統、晁蓋、そして男達に言った。
陳統が弦月に跨(またが)り、黄玉の方に駆けて行った。蒼月も弦月をみとめて嬉しそうにいなないた。
「玉姉ちゃん、俺達について来てくれ。雪華姉ちゃんは大火傷をしてるけど、命に別状はないよ」

「大火傷」
黄玉の青い目が冷たく輝いた。
「俺も詳しくは知らないんだけど、瑛姉ちゃんの話だとかなりひどいらしいんだ」
「姉様の身体を傷つけるとは」
黄玉は怒りで我を忘れそうになった。
「怒っても仕方がないよ、玉姉ちゃん。今はそんな時じゃない。雪華姉ちゃんを、早く安全な場所に移さなきゃ」

陳統の言葉に、黄玉も自分を取り戻したようだ。
「そうだな。指揮は無用様が執っているのだな」
「ああ。そ、そうだよ」
陳統は答えに窮した。黄玉は、無用の本当の姿を知らない。
二人は並んで城門に着いた。
「無用様、遅れて申しわけ……」
李逵の姿を見て、黄玉が言葉を詰まらせた。
「黄玉、よく間に合った。おまえがいればまさしく百人力だ」
黄玉は李逵の目を見ていた。
「無用様、黒旋風に戻られたのですね」
李逵は黄玉の視線を避けた。
「知っておったのか」
「雪華姉様から。曹瑛も知っています」
「どおりで曹瑛が驚かなかったはずだ」
「それに、わたしに稽古をつけてくださる時には、いつも両手に武器を持っておられました。よほど両手に武器を持つことに慣れておられる。そう思っていました」
「儂もまだまだ未熟だな」
李逵はそう言って、かなり遠くにまで行った石勇の方を指差した。
「嬢さんは薬で眠らされておる。意識がなくとも、おまえが側におればきっと喜ぶだろう。嬢さんは、ことの外(ほか)おまえを信頼しておるから

な」
黄玉は少しの間目を閉じていた。その閉じた目蓋から、一筋の涙が零れ落ちた。
「わたしも。雪華姉様はわたしの命よりも大切な方。このような目に遭わせてしまって、わたしは何と詫びていいのか分からない」
「黄玉、自分を責めるな。そんなことを言ったら、儂なんか何度も自刎せねばならん。儂らはその時居合わせなかったのだ。それが偶然か故意によるものかは別としてな。今はただ、嬢さんを守り抜くだけだ」
李逵が黄玉の肩を叩いた。
「それならば暫くは安全です。禁軍の中に姉様を知る者がいて、襲っては来ないと言っていました」
「兵馬都監がか」
「都虞侯も」
「そうか、そういうことだったのか」
「今のうちに太原府から離れましょう」
「そうだな。亀伏山までどんなに急いでも六刻はかかる。すぐに出発だ」
李逵は全員退避の命令を出した。
「黄玉、禁軍の出動はこれだけか」
「いえ、西門にもう一部隊。ここに来るまでにそれを見て来ました。五百はいるかと」
「そいつらが追いかけて来るまでに、どこまで離すかが勝負だな」
李逵は最後に残った晁蓋を送り出すと、禁軍から奪った馬に乗り最後尾につけた。
禁軍が整列しているのが見えた。その先頭で、肩を布で縛った男が手を振っている。兜も取っている。李逵が見やると、男は軽く微笑んだようだった。
都虞侯の審允が馬を飛ばして来た。兵馬都監の蒙重は、何事が起きたのかといらつきを覚えた。西門の警備に就いてもう一日以上になる。

たかが罪人一味に禁軍を使われ、いい加減うんざりしていたところだった。しかも、一向に一味は現れない。黄文炳の命令だから逆らうわけにはいかなかったが、何か貧乏くじを引いたような、面白くない気持ちでいた矢先だった。

「蒙都監、奴ら南門から脱出を図ったようです」

審允の言葉には悔しさが滲んでいる。それはそうだろうと蒙重は思った。罪人を捕らえるのと、ただの警備に就いているのとでは、恩賞に格段の差がつく。こんなに苦労して恩賞が雀の涙では、兵士達の士気にも関る。そんなことでは、他の兵馬都監の風下にも立ちかねない。

蒙重は、太原府駐屯禁軍の兵馬都監の中では、自分が一番だと思っている。経歴、武技、人望、自分に匹敵する兵馬都監は、この太原府にはいないと自負していた。一番若い馮湧など、高官の引きだけを頼りにした青二才だと思っている。うまくことを運んで知府に恩を売っておけば、狙っている経略使の地位にもぐっと近づく。蒙重はそんなことまで考えていた。

「馮湧の部隊はどうしたのだ。まさか、指を咥えて見ていたわけではあるまい」

「それが、兵達の話では、どこからともなく現れた女剣士と戦い、死んだとのことです」

蒙重は、頭を殴られたような衝撃を覚えた。

「馬鹿を言うな。馮湧はあれで、まともに武挙に通った男だぞ。どこの馬の骨とも分からん、しかも女ごときに遅れを取るはずがない。こちらからも斥候を出せ」

蒙重は信じられない思いに駆られた。自分ほどではないが、馮湧は武に優れている。特に槍には、一目置くべきものがあった。それがたった一人の女に敗れるなど、到底考えられることではなかった。

「何かの間違いだろう」

だが本当なら、これは運が向いて来たということだった。蒙重はほくそえんだ。目障りな馮湧が消え、手柄が自分に回って来る。思わず快哉を上げそうになった。

暫くして斥候が戻って来た。
「間違いありません。馮都監は死亡。楊都虞侯も傷を負ったとのことです。部隊は馮都監の命により、攻撃を控えているとのことです」
蒙重は、毀(こぼ)れ出る笑みを抑えることが出来なかった。絶好の機会だ。
「よし。全員南門に回れ。直ちに準備するのだ」
蒙重は、もう一人の都虞侯に命じた。